

「抗がん剤が効かなくなつたら延命治療は終わりです」

医師で僧侶で末期がんの私が語る「少し延びたいのち」の使い方



〈特別インタビュー〉

僧侶、そして医師として数々の末期がん患者を看取つて来た田中雅博氏。自身も末期がんになり、余命を静かに受け入れながら、最期の日々をどう過ごすかを思案している。

*
前回、週刊ポストの取材を受けてから3か月以上も経つて、いま生きているのが不思議です。抗がん剤治療が効いたんですね。宝くじに当たったような気分です。再増悪するまで抗がん剤治療を続けますが、それで延命治療は終わりです。

まほ少しいのちが延びた状態なので、どうやって日々を過ごすかを考えています。

田中雅博氏（70）は、栃木県益子町の西明寺に生まれた。西明寺の住職として、数々の末期がん患者と向き合ってきた。

ところが14年10月に、自身にもステージ4b（最も進行した段階）のすい臓がんが発覚。昨年12月の時点で今年3月の誕生日を迎える可能性は少ないと語っていた。

人は残されたいのちがあるとわずかだということが分かると、死ぬのが怖いという「いのちの苦しみ」がやつきます。それは、医学では救うことはできません。なぜ「いのちの苦しみ」

が生まれるかというと、「自分に対するこだわりがあるからだ」とお釈迦様は言っています。

「自分への執着」を捨てるのが仏教の生き方ですが、「いのちの苦しみ」の緩和は仏教だけではありません。自分の人生がどんなものであつたとしても、そこに価値を見出して「自分の人生の物語」を完成させる。そして、そこにはいのちよりも少しいのちが延びました

3月に2泊3日で、京都で行なわれた日本臨床宗教師会（日本のスピリチュアル・カワーカーの会）の発会式に行ってきたんですよ。私も少しいのちが延びました

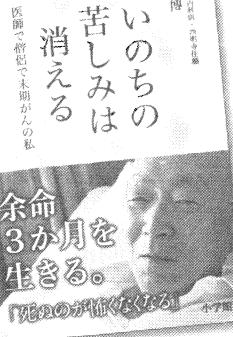
1(Amazon)の「お坊さん便」（※）が話題になっていますが、これでスピリチュアル・カワーカーを派遣したらいと思ふんですね（笑い）。

幸いなことに、いまは色々なメディアが取材に来てくれて、私の話を聞いてもらっているわけですから、こんな嬉しいことはないですよ。私にとっては最高のスピリチュアル・ケアになっています。

生、価値観を尊重します。そしてその人が「人生の物語」を完成させるのをお手伝いする。

それから、進行がんの患者さんやご家族が集まって話す場を毎月1回、西明寺で設けることにしました。私は聞き役です。ほとんどの進行がんの患者さんは日本での病院では話を聞いてくれる人がいないので、みんな、そういう人を探しているんです。

いまは以前に比べると考



医師で僧侶で末期がんの私の物語
田中雅博

田中氏が説く「死と向き合い方」が綴られた新刊は小社より発売中（900円+税）

医師で僧侶で末期がんの私の物語
田中雅博

※インターネット通販大手・Amazonで、葬式や法事の際の僧侶の手配が全国どこでもできるシステム。代金はクレジット払いが可能。